

要なるを感ずるのである。

歴史の了得

(三) 歴史を了得すること。

歴史を知るの必要なることを俟たず。是れ君主一個人の修養としても、又國家統治の上にも、必要なることにして、殊に建國の史實と其以後に於る史的進行とを知ることは、統治者にとり、尤も緊要である。是れ然らずんば、將來に於て、自國の辿るべき道を發見すること能はざるべきを以てである。

中正の德

(四) 中正の德を持すること。

個人の修養上にも必要なるが、君主としては殊に此德を必要とす。支那に在ても、君主中正の德は殊に之を重んじ、西洋諸國に於ても亦然らざるものなきは、そが統治者にとり尤も切要なるを立證するものである。(第六章參照)。

以上は帝王懿德の主要なる根源である。惟ふに、帝德は洪大なり、以て宇宙に比す可し。是れ古來其の日月と併稱せらるゝ所以である。去れば世上の一切全部は悉く探りて以て帝德涵養の資料たらしめ得。否な資料たらしめねばならぬ。大海は清濁併呑し

尙書に所謂帝道

有極、

て而て濁らず。日月の運行に其軌あり、常に遍照して殘す所なし。帝德亦之に副ふを要す。而て帝德修養の方法も、亦元より源を茲に發せねばならぬ。茲に於て余は言んと欲す、「帝德は獨り帝者によりてのみ之を涵養し得」と。書に曰く

無偏無黨、王道蕩蕩、無黨無偏、王道平平、無反無側、王道正直、會其有極、歸其

と。是れ即ち帝德の規範にして其真髓に外ならぬ。

斯くて、吾人は、如上の深遠なる帝王の懿德を詳に考究し、其真諦を深く翫味する時、其中、又自ら、極めて洪大なる不斷の實現力を保有せるを察知することが出来るが。是即ち帝德の一面にして、「帝王の武德」に外ならぬ。余は之を左の數項に要約し得るものと惟ふ。

帝王武德の要諦

- 一、率先躬行、進んで邪惡を斷絶し、一切の眞、善、美、愛化に努むること。
- 二、歴史に基く本然の使命を了得し、一切と共に其實現に努むること。
- 三、常に敬神の念を保持し、中正の德を維持すること。

我國天皇の御

余は記して茲に到り、感慨無量禁じ能はざるものがある。是れ他なし。我歴代 天皇が盛徳無比に涉らせ給ひ、其御懿徳が全く前述せる帝徳の理想に合致することにして、就中 天皇が盡く常に實行を以て先とし給ひ、躬ら範を國人に示し給ひ、天下の憂に先ちて憂ひ給へる御迹を拜察し得ることなるが、是即ち前説せる帝王武徳の精髓に外ならぬ。而て茲に、我國の皇國たる所以があり、眞の武國たる所以があり、寶祚の天壤と共に無窮なる所以がある。天壤無窮は固より 天祖の言寄さし給ふ所なるも、歴代 天皇の斯る御努力により、あるが故にあらしめ、榮ゆるが故に彌榮えしめ給ひつゝあるものと云はねばならぬ。

我國古來の特

色
惟ふに我國古來の特色は、上下を通じ、何事も、單に議論や口先許りでなく、萬事に、止どめ難き實行性を包有せる點に存在する。是れ抑も何ものにも代へ難き皇國の美點にして、それが常に、歴代 天皇の御躬行により、其範を得たること、固より論を待たぬ。然も現代に於る我國上下の此點に關する實狀如何。余は明治以來這般に對する世態人情の變遷を觀、遠く史實に鑑みて感慨無量なるものがある。希くば、國民一

般、殊に識者長上者を以て任ずる者よ、卿等先づ徒らに世の潮流に阿り、世態に諂ひ議論や瑣事の利害に齷齪することを止め、速に人生、國家本來の面目に覺醒し、之に基く武徳を振起して、狂瀾を未倒に挽回せねばならぬ。而て之が爲め、先以て、常に之を、歡聖文武に渡らせ給ふ 神皇の御徳に基かしめねばならぬこと、云ふ迄もなし。

易に所謂「神武不殺」の道が我武國の思想に合致するものなるは、曩に説述せる所なるも、我國 天皇の武徳は夫れ以上のものにして、「まこと」に基く仁愛其者の一面に外ならぬ。而てそを象徴するものが、長くも我三種の神寶の一たる寶劔である。西洋諸國でも其他の國でも「兵」を以て兇器となし、寧ろ之を厭ふに反し、我國に在ては古來之を神聖なるものとした。或は之を自己精神の表現として神社に奉獻し、或は之を御靈代とし、天瓊矛、草薙劔、詔靈劔は無上の神寶とせられ、傳來の太刀を愈々研磨することは古來より我國の重要な習はしなりき、是れ劔は神徳の顯現せるものにして仁愛の進展に關する果敢斷行を意味し、治國安民の理想をそこに表現するを以て

我國に於ける

ある。斯くて我國の刀劍はどこ迄も活人を本旨とし、血に渴する殺人具たらざりしものである。

天皇は常に「安國と平らけく御代しろしめす」ことを以て天職となし給ひ、其天職を果させ給ふ御道として、特に武徳を重んじ給ひ。中世以後に到りても、武將は常に天皇の命を奉じ、武徳により安民護國の責を果すを以て己れの任とした。元來、神劍は心力の限を盡して鍛鍊に鍛鍊を重ねし結果、「まごころ」の精髓として明煌々たる公明果敢の明德を發揮せるものなるが故に、吾人は須らく之に遵ひ、御歴代 天皇の深厚なる武徳に倣ひ、益々「まごころ」の美德を研鑽し、慾を制し、私を去り、心力を盡して人格の「まごころ」を陶冶し、公正の明德を發揮せねばならぬこと、言を待たぬ。

第十二章 武將の所期と其修養

茲に所謂「武將の所期と其修養」とは、特に日本帝國武將の夫れを意味す。そこで前章に於て、帝王武徳の理想と、我國 天皇の御武徳が全く該理想に一致せるものなる

天皇御武徳の
顯彰を以て念
とせねばなら
ぬ

名將と敬神

ことゝを説いたが、其趣旨や、我國軍成立の根源及び由來を考究すると、何人にも我國武將の期すべき所が想起されざるを得ぬ。這は云ふ迄もなく、我國武將の心懸が、徹頭徹尾、前章に述べた 天皇御武徳の顯彰を以て念とせざる可らざることである。而も之が爲め、そは必ずや「敬神」に導かざるを得ぬ。是 天皇御武徳の顯彰と 大元帥御意圖の運用と貫徹とは、之を個我の力に待つ可く餘りに洪大であり、是非共、天地之正に乗じ、靈界の冥助を仰がざる可らずてふ信念に到達せざる能はざる可きを以てある。古來の名將にして克く偉功を奏し救世済民の大任を全ふするものにして皆敬神の念を保持せざるものはない。是れ古今の史實が歴々明示する所にして、そが又畏くも我 神皇御懿徳の主要なるものたること、前述せる通りである。畏くも神武天皇の御東征が此適例であり。近くは去る明治三十七八年戦役の際、日本海の大戦に於て、我東郷提督は、平素より深く躬ら體驗せられたる偉大にして熱烈なる宗教的大信念の許に、能く好機を觀破し、克く部下の全信仰を統一し、之に依り、自然に彼の絶大なる功績を擧げ得られしものなるは、私の潜かに信じて疑はざる所であ

る。此他當時の滿洲軍總參謀長兒玉大將が奉天戰前毎日密かに天日を禮拜し軍の戰捷を祈願せられしは、有名なる事實にして、後人の人口に膾炙する美談であり、又筆者は嘗て同大將が陣中深夜潜かに水垢離を取られ戰捷を祈られしとの話を耳にせしこともある。以下尙如上修養の基礎條件として、「虚己」に就き、説述しよう。

此「己を虚ふする」てふ事は古來、和、漢、洋の學者、思想家により稱へられて居る。表面上此文字を掲げざるにしても、之を味ふと、此意味の事が所々に存在するを發見し得。例へば、尙書、易、老子、莊子、佛教諸經典、我國武士道に關する諸典籍、其他徳川時代の各種典籍、西洋の倫理學書、哲學書等に於て、此思想の迹を見ることが出来る。之を學問的に研究すると、中々趣味深き事なるも、今之に入込む事は出来ぬが。一口に言ふと、這は何事にまれ、凡そ吾人が、一事に專念し、それを達成せんと期するに當り、先づ是非とも、取らざる可らざる我的態度である。彼の大乘佛教に於て先づ説かるゝものは、磐若の空にして、是即ち如上「虚己」の態度に異ならざるものなるが、それは實に煩惱即菩提或は娑婆即寂光淨土の大主張を胚胎する準備

的基礎的態度に外ならぬ。

老子曰く「道の道とす可きは常の道に非ず、名の名とす可きは常の名にあらず、無名は天地之始、有名は萬物之母……」（老子第一章）と。是世俗の所謂道は未だ道くさき境地を脱せず、そは眞の道を捕捉する所以に非ず、斯の如きは未だ眞の大道ならざるを、喝破せるものにして。是亦「己を虚ふする」所に大道を現出し得可きを道破せるものに外ならず。這は老子全篇の神髓にして、西洋の倫理學や、哲學にも之と類似せるものがある。

神鏡の御徳

又畏くも我三種の神器の一たる 神鏡の御徳は如何。森羅萬象の來るに隨ひ之を映じて餘す處なし、而も其去るや毫も其跡を留めず 常に虚しき元の姿に還るが、此虚しき元の姿に還ること即ち常に己虚しきことが、是れ至公至平萬有に照臨して之を包容愛撫し給ふ神徳の基礎的象徴にして、そは應て一面 神璽と神劔との靈徳を胚胎する準備基礎的體勢に外ならぬ。又往古に於る祭政一致の政治の如きも此點よりせば大に意味深きことであり、一切を神意に仰ぎ、些の我儘なき清淨なる心もて統治を行へ

祭政一致の政

中孚の徳

る状態を云へるものにして、是亦「虚己」の態度に外ならず。之を今日の政黨のあるものが、稍もすれば黨派心に燃ゆる心を以て政權の爭奪を行ひ、時に國民が犠牲踏臺にせらるゝ状況にあるのと比較して、其差霄壤管ならざるは識者を待て知らざる所である。又易に中孚の卦、☱が有り。其説明を見ると、信まことにして中虚を意味す、竟下巽上にして、下悦びて上に應じ、上は巽にして下に順ふ、是孚の義たりとある。又其經文を見ると、「豚魚、吉、大川を渉るによろし」とあるが、是中虚の孚あれば、愚の魚にても感動せしめ得可く、則ち吉にして、如何なる大川をも渉り、如何なる困難をも排除し得るを意味するものである。是即ち中虚の徳なるが、是亦己を虚ふし我意を挾まぬことにして、又同時に中道の「まこと」をも顯はすものたり。而て我國古來の清明心が之であるし、又英語に所謂 Divine Nature の如きも畢竟之に外ならざるものが見ることが出来る。

清明心

偕此己を虚ふし、我意を取り去ること丈にては、鳥渡聴くと消極的に聞え、何となく物足らず感ぜらるる如きも、決して左にあらざ。其虚ふすることが、同時に絶大に

名妓高尾の詠歌

充實することになるのである。茲には説明を略するが、少しく垢抜けて考へ、哲人的に考ふれば、容易に了解し得らるゝことである。彼の禪宗に於て徳(得)の本體は「住無所得」の境地なりと爲すが如き、又彼の俗言「言はぬは言ふに彌や増さる」てふことの如き、又名妓高尾の詠せる歌「君は未だ駒形あたりほとゝぎす忘れねばこそ思ひ出もせず」の如き、何れも此理を道破せるものに外ならぬ。尙左に序乍ら卑近なる一例を掲げよう。

名俳優の虚己

昔吉澤小傳次と云ふ京の俳優が大和巡りの時、法隆寺にて鶴籠より出で、「今日は一日鶴籠にて揺られて、血の道が起りしと」云ひしが、之を聞きし人々きよう心なりとて笑ひしも、さすが人情の奥を極めし西鶴は之を稱賛し、誠に女形の情深しと云ひしとの事なるが、之を熟考すると、詰らぬことの様でも、そこに我國の長上者の辨へねばならぬ道が存する様に思はるゝ。そは元來芝居とは云へ、男が女になると云ふことは、石を木とし、扇子を海原にすると同様の意味の事である。女形の役者は心は勿論形迄も女として居なければならぬ。心に女と同一の情合ひを働かせるのみならず、體

にも同一の情合ひを働かせなければならぬ。即ち心の扉を開いて彼と我とを同一水平面に据ゆる許りでなく、形と筋肉との上の區別をも破り、彼と我とを同一水平面に置かねばならぬ。茲迄行かねば、幾萬の觀客の顔に我知らず手巾を宛てしめて、甚大の感動を與ふる事は出来ぬと思はるゝが、茲にも又男を忘るゝ、即ち「己を虚ふする」てふことが前提となり居るを認むることが出来る。

「虚己」の徳

「虚己」に就き、説て覺えず長く成つたが、這是聊か理由あることである。何となれば兵馬倉皇の間に馳驅する將帥に在て、「虚己」は比較的多くは難事たる可きも、而も其要度や一層大ならざるを得ざる可きを以てゝある。斯くて余は此二字を以て、統御、統率竝に統帥の準備的基礎的事項たらしめんと欲するものである。

そこで本問題に立返るが、斯る「虚己」てふ基礎の上に建立さるゝものは何なりや。そは云ふ迄もなく、「畏くも叙聖文武に渡らせ給ふ我 大元帥陛下の御武徳を奉戴する」てふことに外ならぬ。吾人苟も身を軍籍に置き、平素より 神皇の殊恩に浴し、陛下の貔貅を統率するの重任を辱ふする者、如何んど、此殊遇に酬ひ奉る所なくして

可ならんや、先以て、己を虚ふし、小智恵を出さず、小我に捉はれず、只々一途に大元帥陛下の御武徳を仰ぎ奉りて之を身に體し、常に敬神の念を保持し（敬神に付深遠なる意義を有するも暫く説きぬ）之を以て我命ともなし、光ともせなければならず、そこに始めて眞の統率、眞の統帥が實現せらる可きである。斯くて吾人や、最早以前の個我にあらず。そは日、本人たる力を恢復し充實せる眞武徳の保持者であり。宇宙萬世を籠蓋し、一切萬有を包容し給ふ 神皇の御力と御徳とを頂きたる我であり。十方世界に其身を現じ、大自在力を獲得せる章駄天其ものに異ならず。百萬の強敵尙破る可く、金城鐵壁亦怖るゝに足らざること言を待たぬ。

統率統御は難事にして、統帥は至難である。其研究は日に複雑を加へ、盡期あることなし。而もそは整理を要し、統整を求む。是れ研鑽や、日に新なるべく、創造惟れ昂めざる可らざるを以てゝある。而て這も亦、先づ之を「虚己」てふ基礎的態度に依らしめねばならぬこと、言を待たぬ。

第三編 結 論

第一章 將來の戦争

戦争の現象が將來の世運に於て、將に如何なる地位關係を取らんとするかは、世界と人類とに課せられた現下の大問題にして、斯の如き小冊子の能く悉す可き所ならず。而も人類の歴史は往古以來、徐々に之が答案を作製しつつあるのである。以下如上に關する研究に基き、必要なる基礎事項に就き、考察しよう。

一、戦争の有無 茲に特に問題たらしむる要を見ざるも、念の爲め單に結論文を掲げよう。

將來に於ても戦争は尙止まざる可し。是れ人間が二重性を有する限り、人世が矛盾を有する以上、國家及吾人は、時ありてか、そが保有する止むに止まれぬ「まこと」の要求として、武徳及武道の發現を抑留し得ざる事態を有すべく、其結果として、時に

戦争の有無

或は、戦争に導かざるを得ぬ場合なきを保し難かる可きを以てある。

世人或は將來戦争が絶無となる可きを信ずるものありと雖、這は謬見たるを免れず。而も前編中にも述べた通り世界人類の凡てが宇宙と人生との眞義に覺醒し、自ら省みて、自發的に武力を撤廢する時期に到達せば、茲に初めて、武器による從來の戦争は自ら絶滅さるるに至るべく、這は將來ある時期に於て實現せらるるに到る可きこと蓋し疑なき所なるも、而も其實現は遠き將來なるが故に（當分斯かる望なし）、現時に於て、斯かる空想の驅る所となり、過早に軍備を撤去し、或は過度にそれを縮少せば、世界各國家間の勢力は忽ち其均衡を失ひ、自國の危機を招き、延ては、全世界の戦禍を勃發するの憂なきを保せぬ。

「ソロヴィヨフ」の所言

尙序乍ら一言するが、露國の倫理學者にして哲學者たる「ソロヴィヨフ」 Solov'ev 氏は、其著「道德哲學」中言つて曰く、「余は將來、黄色並に白色人種間に一大戦争の勃發す可きを推斷せんと欲す」と。此推斷が果して能く適中す可きや否やは、宇宙の秘機に屬し、俄に豫斷を許さずと雖、孰れにしても、將來に於て、若し永久平和（武力的

戦争の廢絶を意味す)が招來せらるる時期ありとせば、少くもそは極めて猛烈に施行せらる可き第二次世界戦争終了後たらねばならぬ如く惟はれる。斯くて若し如上の平和が實現せらるゝとせば、其場合、全世界は現時に比し、より良き統制を要するも、そが一個の大世界に統一せらる可きか、若くは文化發達の歴史的進展に基きて東洋及西洋の二大部類に統制せらるべきやは、緊切にして微妙なる大問題である。這も亦宇宙妙機の進展に俟つ可きものなるも、余は後者を以て、最も如實にして實現性を有するものと惟ふ。暫く茲に特筆して後昆の實證に俟ふと惟ふ。

二、將來の歸趨 戦争將來の歸趨は、現時に於て、略々左の數項に要約し得るものと惟ふ。

戦争將來の歸趨

(一) 戦争の本體として

(イ) 量的に見て 地理的に擴大し、空間的に益々其範圍を廣汎ならしむ可きこと。

(ロ) 質的に見て 其内容益々複雑、精巧、機械的となり、其性質彌々靱強と

なる可きこと。

(ハ) 時間的に見て 長年月に互り得可き可能性を有すること(無論即戰即決を希望するも)。

(二) 目的的に見て

一層道義的たるに至る可きこと。

在來の戦争を目的的に見て區分すると、幾多の種類に分ち得可く、而も實際上諸種の動機が互に相交錯纏綿して存在せるは、明瞭なる事蹟である。而て此事態が尙今後に於ても繼續す可きは蓋し疑無き所なるも、余は、將來、如上諸動機を糾合する主要なる中心目的として、道義的要素を必須とするに至る可きを、唱導せんと欲す。別言せば、そは、戦争の起因たる可きあらゆる諸動機が盡く上述の道義的要素に歸一せられ、之により綜合統一せられねばならぬことを、意味するものにして。惟ふに將來の戦争が如上を以て其理想となし、漸次之に傾くに至る可きは、余の確信する所である。否な斯くあらしめねばならぬ

ものと惟ふ。此事に付ては尙後述する。

(三) 効果的に見て

(イ) 破壊威力の増大、慘禍の猛烈。

(ロ) 經濟的打撃の甚大、其影響する範圍の擴大、及該傳達の迅速。

(ハ) 國民精神に絶大なる衝動を附與し、思想の轉換を促進す。

這是歴史を見ると、夥多の實例があり、近くは歐洲大戰の結果に見ても能く分かる。惟ふに、戦争が、一面、平時に於て準備し、醗酵し、蓄積せられたる思想の爆發に外ならざる以上、それが國力を賭して窮極迄戦はるる上、其勝敗に係らず、思想上に一大 shock を波及し、延いて思想の轉回を招來するに到る可きは想察に難からぬ。

(ニ) 國際關係に大なる變動を生ず。

(ホ) 文化の進展。

(ヘ) 文明の促進。

三、實現の難易

將來に於る戦争の發生が益々困難を加ふること。

之が原因としては、左の諸事項を擧ぐることが出来る。

(一) 道德上の原因 戦争の道德に及ぼす影響は、之を在來の史實に視ると、良效悪果相交はり、頗る多端なるを免れざるも、人文漸く進むや、戦争の生起を以て無意味となし、有害となすの思想漸く多さを加ふるは、一般の傾向にして、今や世界道德の進歩は、漸く此程度に向ひて進まんとしつゝあり。斯くて將來の戦争は、之を往時に比し、如上の見地より益々困難を加ふ可く、之が爲め戦争の生起を妨障する機會は將來彌々多かる可きである。

(二) 政治上の原因 是、將來に於る交通の發達は、在來疎隔せる列國間の事情を一層疎通し、列國の間及國の社會的成分たる個人間に、益々身體的及精神的因縁關係の親密を加ふべきを以て、一面、列國間に猜疑と紛争とを發生すべき機會を減少し、他面、陰謀を逞うするの餘地尠少なるに到る可く。加ふる

に、衆多列國の利害關係は將來彌々交錯紛糾す可きが故に、一國の行爲は直に爾他諸國の利害に重大の影響を及ぼすに到り。互に相牽制、制肘し、容易に手出し能はざる情勢を現出す可きを以てある。

(三) 經濟上の原因 這是將來の戰爭に於る軍費が莫大なる爲め、交戰國は何れも容易に其負擔に堪へざる可く、加ふるに現時の經濟が、益々世界經濟の域に進みつゝあるを以てある。

斯くて以上列舉せる將來戰の正體に見ると、其が容易に生起し能はざる可きは、察知に難からず。而も余は、茲で更に、將來に於て一層戰爭の實現を困難ならしむ可き重要なる他の一要素を指摘したい。それは他ならず「人の覺醒」である。以下之に就き略述しよう。

曩にも述べし如く、將來の戰爭は、一層徹底的に舉國的性质を有す可きが故に、それは、昔日の如く單に君主や武士階級の仕事でなく、實に全國民の双肩に振り懸る極めて重大なる負擔であり。而も現代の國民や往日と異りて、既に「我」の何物なるかに

付、覺醒しつゝあるのである。彼等は決して昔日の如く、妄りに權威に盲從するものに非ず、服従するには夫丈の理由を要求する。而て斯る覺醒は將來益々深刻の度を増す可きが故に、國家の戰ふや、少くも眞に止む可らざる極めて重要なる理由を有せねばならぬ。然らずんば、如何にして、斯の如き覺醒せる全國民を驅て、如上の重大なる負荷に趨かしめ得可き。其失敗に終る可きは火を賭るより明である。之を我國に看るも、一朝開戰に際し、命令一下、勇躍して征途に上る可き我忠良なる國民は決して富有なるものゝみに非ず。父母已に老ひ、妻子は病床に呻吟するものもある。而も斯る極大の困苦に堪へ、精神的苦痛を忍び、喜んで奉公の誠を捧ぐるは、一にそが、我が大君の御爲なるが故であり、何ものにも代へ難き國家使命の追進(第二編第一章「國是」參照)たるを以てある。若し然らずして、そが、一部のものゝ利益や功名心の爲なりせば、果して如何。到底上述の成果を得ざる可く、そは單に法によりてのみ強制さるゝ土偶の集團に過ぎざる可く。勝敗の決、固より筮に待て知らざる所である。

前にも述べたが、之に依て之を見ると、將來の戦争が一層道義的要素の支配を受く可きこと、論を待たぬ。是、我等にとり、上述せる「大君の御爲」、「國家使命の追進」てふ二事、別言せば我等の道義を外にしては、戦争の發生を餘儀なくす可き所謂「眞に止む可らざる極めて重要なる理由」を發見し能はざる可きを以てある。

斯くて余は茲に、將來の戦争が、どうしても、一層徹底的に正義を基とせざる可らざるに到る可きを信ぜんと欲する者であり。尙又斯くすることが、戦争を最も有利に發展せしむ可き所以なるを、斷ぜんと欲する者である。そこで、國民全體、殊に爲政者や、將帥の責任が極めて重大であり。之が爲め平素の研鑽と修養と覺悟とが特に必要となるのである。而てそが又固より、「まこと」と「まごころ」とに基かしめねばならぬこと言ふ迄もない。

戦争の仕方に關する將來の趨勢に就きては後述する。

第二章 戦争の勝敗

將來の戦争は正義に基くものたらねばならぬ

勝敗の意義

戦争には勝敗がある。而て普通の考では、對手方の軍が抵抗力を失ひ、再起の望なきに到れるとき、其他該軍には戦闘力が未だ有つても、國民全部の交戦志氣が沮喪するか、或は其心機一轉し最早交戦を繼續すること能はざるに到りたる時、之を戦勝と稱し得よう。而も元來、戦争に於て、對手國の一方は某目的を有し之を達成せんと欲して立ちしものであり、他方は之に反對して立てるものなるを以て、對手國の一方が他方の意志を屈服し、該國當初の目的が達せられしとき、其戦勝は初めて完全なりと云ふ可きである。然れども這は主として外交の範圍に屬す可きが故に、寧ろ之を政治の部類に屬せしむるを至當と爲す可きも、更に一方より觀るときは媾和の成立により戦争が止み平和状態が恢復せらるゝものなるを以て、之を戦争の一部と見得られざるに非ず。這は戦争と政治との極めて密接に交渉錯綜する微妙の點である。

戦争の勝敗は一應以上の解釋で方が附くが、尙一層深く考ふると、世上には、非義非道の方法で争闘に勝ち、戦争に克つものもあるが、世人は之を見て非難し、時には公憤を發する。瞞まし打は卑怯とせられ、強國の弱國に對する不義の抑壓は、假令一

時の成功を見るも、天下の輿望を失ひ、世界の信用を失墜し、少くも後世眞史家の嚴正なる筆誅を免れぬ。這是東洋古來の尊嚴なる正義の精神にして、殊に我國武士道の眞髓である。孔子謂て曰く、「不義の富貴は浮雲の如し」と。是れ不義により獲得せる富貴が極めて卑むべきを謂へるものにして、人生の眞諦に覺醒せる哲者の立言深く味ふ可きである。而て國家亦正に斯くの如かるべきは、智者を待て知らざる所である。余は此見地に基き、戦争が正義に依り施行せらるゝに於て、其勝利や初めて眞の勝利なりと稱し得可しと惟ふ。是れ余が前章に於て、將來の戦争が正義に基かしめざる可らずと爲せる所以である。

以上は戦争の勝敗を横に見しものなるが、之を縦に見んか、見方によれば敗者必ずしも敗者と云へざるべし。何となれば、戦敗者は時により其志氣一層旺盛となり、愛國心を増長し、難關を切り抜けんとする一段の勇猛心を生ずべき場合あるを以てある。臥薪嘗膽、後年戦勝の基を開ける決心と潜勢力とは、是れ已に戦敗者越王の心裡深く刻まれし所に非ずや。此點を以て之を謂へば戦敗は已に戦勝を孕めりとも云ひ得

戦争の勝敗に
對する縦の觀

よう。之に反し、戦勝者にして心驕り、當面の戦勝に酔はんか、そは已に他年没落の種子を胚胎するものである。而も開戦の動機にして不義ならんか、敗戦が多くの場合該國家の亡滅に導く可きは、從來の史實が歴々明示する所である。去れば此見地に立ち「時」の考を含ましめて觀察するとき、勝敗必ずしも勝敗ならず、其眞價や一に正義の實現如何に繋つて存するものと云ひ得よう。而て這は即ち云ふ迄もなく、余の所謂「まこと」に基く武徳と武道との發現に外ならぬ。

戦争に勝敗あるも、その眞價は單に外見による臆斷を容さず、其眞價如何は、先づ之を歴史の長き歩みに於る其位置如何に察し、之を「まこと」の鏡に照して、その公正なる批判に求めねばならぬ。殊に將來の戦争に於て一層然りとすべきこと、上來の所述により明瞭にして多言を要せぬ。

去れば現時の戦争に於ては、知的に言つても、道德的に言つても、將又軍事的に言つても、何から見ても優秀なる國民にして、始めて勝利を得可しとするのが、原則なりと稱して、差支へない。換言すれば、過去に於て申分なき修養を遂げ、善良なる生

活を營める正しき國民が勝つものと豫斷し得よう。「パーデョット」Percehot氏は其著書中に「勝つべきものは勝つ」と言つて居るが、誠に能く近世戦争の真髓を表はして居る。平素勝つべき士氣を鍛錬せず、準備覺悟を懈り乍ら、徒らに戦勝のみを夢みる如きは、木に縁りて魚を求むるの徒にして、必ずや他日萬年の悔を貽すであらう。戦争は、之に従ふ國民が過去に於て、知的に、道德的に、經濟的に、社會的に如何なる生活を爲し來りたるかを示す鏡であり。勝敗は過去に於る國民精神の振否と實生活の張弛との反映に外ならぬ。

勝敗の主因

試に戦争勝敗の原因を擧ぐると、次の數項を列擧することが出来る。

一、志氣の振否　　這是勿論説明する迄もない。而て這是、云ふ迄もなく、先づ克く「真我」を了得し、國家と國是との眞義に徹底し、而も世界、宇宙の意義を辨別する、余の所謂「まこと」と「まごころ」との眞源泉より、不斷に湧出せらるゝものたらねばならず。斯くてそは一に、平時に於る國民精神の作興と實生活に於る其の如實なる鍛錬とに基かしめねばならぬこと、論を要せぬ。

二、資源、富力　　這も亦説明を要せざるも、之等は勿論偶然に發生せらるゝものに非ず。之を得るには、其道を極はめ、適切なる方法を講ぜねばならぬ。此他之が爲め「エネルギー」も必要であり、質素勉勵も肝要であり、經濟界の眞智識と之に基く善處も亦必要である。何れにしても資源や富の創造に必要な心身の素質は、長日月に亙る不屈の鍛錬と修養とに依り得らるゝものにして、光輝ある奮闘の歴史を離れて之等は存在せぬ。又假令極めて稀に存在しても、それは不義の富貴であり、聽て雲散霧消する運命を免れぬ。

三、國民の統制　　是亦、多言を要せずして明瞭である。而て這是近世國家の性質上、政治の良否に關するもの、極めて甚大なりと惟はれる。

政治は元來、國民の歴史、思想、人情、習慣、風俗、其理想等の發現す可きものであり、その限り其の方式と運用とは一に國民性に適應するものでなければならぬ。若し之に反し、單に他國の形式を模倣するに止まらんか、一朝國家が危急存亡の岐路に立つ如き重大時機に遭遇するとき、そが、意外の破綻を來し、國民の統制上重大なる

欠陥を生ずるに到らざるを保せぬ。這是國民の平素より慎重に考究せねばならぬ重大の事項なりと切思する。熟々史實を觀察すると、國民の性格に合致せざる醜惡なる政治により統制せらるゝ國民は戦争てふ宇宙的審判に於て敗訴した。而もそれは本來自己の墮落より自然に胎胎せるものなるを以て、當然の責罰として其判決を甘受せねばならぬ。

政治や、須らく國民の政治的良心を善導しそを自由に伸展せしむるものでなければならぬ。不良なる政治を有する爲め戦敗を招かんか、そは國民に、政事に對する眞の自覺と意氣地なきの證左にして、誰を怨むべき様なきこと、言を待たず。斯くて、這も亦「まこと」と「まごころ」との眞の自得に依らねばならぬこと、云ふ迄もない。

四、國民心身の健全 是亦毫も説明を要せぬ。國民精神は團體生活の基礎なるを以て其墮落により、百般の行爲が頹廢し、義勇奉公の精神が低下すべきは、當然の歸結である。斯くて、民心の弛緩が戦敗てふ天譴を招來す可きこと、言を待たぬ。

身體の健全も亦精神の状態により影響せらる。健康の原因は枚擧に暇なしと雖、鬼

も角そが一朝一夕の能し得る所ならざること、言を待たず。衛生教育の普及、富の分配の公正なること、國民中一人も其所を得ざるもの無からしむること等、結局善良なる生活の運営に歸着する。

之等は畢竟、國民全部の眞底からの自覺と、之に依る實行的訓練と、尙又民衆相互の砥礪により、漸次不斷に向上せられねばならぬことである、故に若し之等が廢頹せる爲め戦勝が得られざる如き事あれば、そは全く平素の心懸が悪いからだと言ふ事が出来る。歴史的生活を離れて勝敗なきこと、言ふ迄もない。

五、智識と技能 今日の戦争は、實は智力と技術との闘争にして、武力の主重なる根柢は智識と技能とに外ならぬ。戦勝國軍の使用するものは、一發の彈丸と雖、戦敗者の企及し能はざる智慧と才能と苦心とを其中に包有せること、云ふ迄もない。之等は或る程度迄は民族の資質に因る所なるも、又同時に、長年月に互る不撓の努力により研ぎ上げられしものである。斯かる辛苦の結果戦争に勝利を得ば、這は固より當然にして、戦敗者は之に付不平を言ふべき餘地を持たぬ。

一度起て太刀を合せる以上、何人も勝ちたいには相違ない。然し勝ちたいと思ふならば、平素之に對する充分の研究を積み、勝てる丈の腕を磨いて置かねばならず、そこに徹底せる自覺と不斷の修養と訓練との必要が存在する。而て之が爲には、國家と國民とを擧げて、常に「まこと」と「まごころ」との一大教育機關たる體度を採らしめねばならず。而も其主義と方針とは歴史的自覺に基く國是に據らしめねばならずと、多言を要せざる所である。

以上勝敗の主要なる原因を擧げたが、それは元より之に盡るものならず。各種の場合に於る錯雜せる原因を明かならしむることは、到底爲し能はざる所である。そこで這は次の結論に導かざるを得ぬ。

勝敗の關係する原因の要約

- (一) 勝利の原因は複雜にして錯綜すること。
- (二) 勝利の原因を要約せば歴史的國民生活全部の反映なること。
- (三) 戦勝の直接原因としては、國軍士氣の振否、其統制及び殊に其教育の良否を擧ぐるを得。

斯くて其は一朝にして作り擧げらるゝものでなく、國民全部による不斷の注意と、警戒と、精進と努力とに依てのみ可能にして、それは結局「まごころ」の修養と鍛鍊とに歸着すべく、斯くて我等は茲にも亦、常住に尊嚴なる我 天皇道に依準せねばならず。文武一如の精神を以て基礎たらしめねばならぬものと切思する。

「ラッツェル」 Ratzel 氏は、「戦争は國民の持てる最後の努力と最終の手段とを用ゆることを餘儀なくせしむる、最も有力なる裁判であり、試験であり、國民生活一つの峯より他の峯の頂に飛躍せしむる向上——若くは向下——の手段にして、一言にして言へば、國民全生活の發現なり」と述べて居る。兎に角、吾人は、常に、健全なる正しき「まこと」の生活を爲し來れるものは強く、而て此強き者が戦争に勝つと云ふ信念を没することは出来ぬ。即ち正しき「まこと」あるものは終に勝たねばならぬのである。別言せば、勝敗てふ因果的なる事實と正義の念力とは遂に必然的なる合致を見るものである。勇猛果敢に戦ふとか、組織、統率が完全なりとか、運用が巧妙なりとかか軍器が精銳なりとか云ふ事の裏面には、正義、忍耐、勤勉、克己、忠實、敬愛、勇氣

信實、儉素、熱情、自由、統一、規律、節制、奉公等人間一切の所謂「まこと」の美德が含まれて居ることを見逃してはならぬ。世の中には一見すると、時に勝敗が偶發せる事柄により支配せらるゝ如く映る事もあるが、其は双方の事情や情實を克く考究せざりし爲に生ずる誤謬に外ならぬ。突發せる事項により、全く破綻を生ずるが如き事あらんか、そは何處かに痼疾や氣の附かざる積弊が潜在するからである。「まこと」の力に満ちて居る者が、少し位の缺點の爲に覆へされる譯がない。

第三章 吾人の覺悟

吾人の爲す可
き覺悟

今や吾人は是非とも一大覺悟を爲さねばならぬ破目に際會しつゝある。そは他ならず、充分に肚を決め、世界環視の大土俵場に臨まねばならぬことである。斯くて我等は舉國一致し、畏けれども錦旗の下に集束し、我尊嚴なる國是の指箴に基き、時勢の樞機を把握し、慎重熟慮、一に正義の所命に従ひて邁進せねばならぬ。斯くて我等は一意、世界の安定を目標とし、東洋の平和を確保し、而て又如上に即して我國家、國

民天賦の使命を全ふする一路に向ひ直進せねばならず。そは一に「まこと」の實現を目標とし、「まごころ」の示す所に遵はねばならぬ。此際此時、一步を誤まらんか、我國に傳統せらるゝ、崇高なる「まこと」の眞精神は、現世界より覆没せられ、我國家と國民とは永く世界の舞臺より退かねばならず、斯くて吾人の生存は脅かされ、應ては奴隸的境遇に陥らざるを保し難い。這是世界の平和と其眞文化促進の爲め默示す可らざる所たるのみならず、御互の祖先と子孫とに對し申譯なきことならざるか。

さあ、時は來つた。機は正に動かんとしつゝある。否な正に動きつゝあるのである。斯くて我等は時に應じ機に乗り、「まこと」を翳して世界の大道を濶歩せねばならぬ。而も先づ充分に落附き研究し、準備し、遺漏無からしめねばならぬこと、言を待たぬ。

今や極東の風雲は動きつゝある。吾人は應て驚天動地の大暴風雨に遭遇するものと覺悟せなければならぬ。斯くて我等は少くも二ヶ國を相手にして戦ふ（後には三國になるかも知れぬ）の決意がなければならず、そは又實に過ぐる世界大戰に幾倍するの辛酸を嘗めねばならぬものと覺悟せねばならぬ。借問す、我國家と國民とは果して如

極東の風雲急
なり

上の國難に堪ふ可き士氣と忍耐力とを有するや否や。

余の確信

余は確信す。今や我國の世相頹廢し志氣衰退せるが如きも、這は一時的假象に過ぎず。苟も我等の胸奥深く秘藏せらるゝ一片正氣の耿々たるものあらん限り、一旦緩急に當り、指導と其處理宜きを得ば、舉國的結束必ずしも爲し難きに非ずと。要は唯、正と斷とに在て存するのみである。而もそがどこ迄も深く「まこと」と「まごころ」とに基かしめねばならぬこと、多言を要せぬ。

將來戰に對する二三の考察

尙序乍ら將來戰に於る我國民と國軍との覺悟せねばならぬ主要事項を附述しよう。

- 一、國家の統制、戰略、戰術及機動の一切に於て、在來の型に捉はる可らず。(勿論既存の型を尊重し、之に據らねばならぬも)
- 二、諸事獨創的能力を發揮せざる可らず。(在來のものを生かさねばならぬこと言を待たぬ)
- 三、戰術に基く活ける技術の發揮に専心戮力せねばならぬ。這は獨り軍部のみならず舉國的に、驀進せねばならぬこと、言を待たぬ。(智識を廣く全國否な世界より採らねばならぬ)。

ねばならぬ)。

四、空軍の急速確實なる發展に主力を傾注す可し。

現時技術の趨勢を以てせば、近き將來に於て、嶄新にして有力なる航空部隊が戰爭に使用せらるゝ日の到來するものと豫め覺悟せざる可らず。而て之に對せんか、海軍艦隊は往日の威力を發揮し能はざるに到るやも知れぬ。斯くて、將來或は陸、海軍とも從來に比し、其位置を空軍に譲らねばならぬ場合が発生するかも知れぬものと惟はねばならず、或る場合には、陸海軍は空軍を援護し之を働かす爲主として活躍せねばならぬことになるかも知れぬ。(這は余が大正十二年陸軍大學校及陸軍砲工學校に於て空軍要塞の必要に就き説述せると、其趣旨を同ふするものである)何れにしても、未だ尙劣勢なる我空軍を一層急速に進展せしむることとは、現下に於る何よりの急務と云はねばならず。而て這は勿論眞の舉國的協力の依らねばならぬこと、云ふ迄もない。

五、緩急に對する措置は何事も疾風迅雷的に機先を制せねばならぬ。之が爲め飽迄事

前に於る冷靜にして周到なる研究を必須とする。

國民の統制と敵航空機に對する措置とは豫め周到に綿密に而て又一面大膽に計畫せられ、敵に乗せらるゝことなきを肝要とする。之が爲め、國民は一切の私欲を捨離して斷乎たる處置を採り、各々其位置に依り、其器に應じ、心身の限を竭して奉公の「まこと」を致さねばならず。政府と軍とは之を實行せしむることに關し、斷乎たる決意を持せねばならぬこと、言を待たぬ。

以上は兎も角私の「まごころ」に映じたる時局觀とも云ふべきもの、一端である。然し乍ら、斯かる研究が盡く無駄になれば、それは誠に悦ぶ可き事にして、君國の爲め此上の慶事はない。余は是非、その無駄ならんことを祈願して止まざるものである。而も余は終に臨み左の如く言ひて、本章を結び度いと惟ふ。

「夫れ平和と戦争とは糾へる繩の如く、其一を知らざれば、他を識り難し。斯くて、吾等は之が爲め先づ戦争に對する覺悟と準備とを了得せねばならず。そこに始めて、眞に平和を談じ、そを實現し得可し。」

結 言

國民よ。今やお互人類は世界の轉換機に際會しつゝある。そは實に地球始まつて以來最初の轉換期たるのである。夫れ非常時に際し、非常の見識と覺悟なかる可らざること、固より論を俟たず。去れば、斯る重大時機に際會せる吾人や、勿論極めて多望多幸なるも、而も又一面甚大の困難や苦勞に逢着するものと覺悟せなければならぬ。這はある意味よりせば、世界の國難とも稱せねばならぬ。

正義の國民よ、深く反省せよ。往事に鑑みて自重せよ。而も又勇猛精進倒れて後已むの決意を有せねばならぬ。

凡てに潔き日本國民よ。今や古びつゝある思想を脱し、「マルキシズム」、「レーニズム」を萬世に亘りて清明なる我 天皇道に消化し盡くせ。尙又頑迷なる守舊思想より自由なれ。斯くて諸々の不淨と罪穢とを去り、それを禊ひ淨めて、「まこと」の眞髓を把握し、一意その實現に精進せねばならぬ。重ねて言ふ。今や世界は一大轉換機に際會

し、曙光已に地平線下に嚇耀たり、東天懸て、煌々たる朝暎の上昇を現前す可く、時機正に爛熟し、近き將來に逼つて居る。否な既に己に曉天の曙光は輝き初めつゝあるのである。願はくは、同胞諸賢よ、お互に一刻も速に覺醒し、覺悟し、決斷し、自己本來の面目に立ち返らんこと、切望に堪へざる所である。

曾て我國を以て、世界に於て正義を實現すべき唯一の國なりと唱道せる佛人「リシャル」Richard 氏に左の詩歌がある。

「リシャル」氏の詩歌

曙の兒等よ、海原の兒等よ。

花と焰との國、力と美との國の兒等よ。

聽け、涯しなき海の諸々の波が、

日出づる諸子の島々を讃ふる榮譽の歌を。

諸子の國に七つの榮譽あり。

故にまた七つの大業あり。

さらば聽けその七つの榮譽と七つの使命とを。

一

獨り自由を失はざりし亞細亞の唯一の民よ。

貴國こそ自由を亞細亞に與ふべきものなれ。

二

かつて他國に隸屬せざりし世界の唯一の民よ。

一切の世の隸屬の民のために起つは貴國の任なり。

三

かつて滅びざりし唯一の民よ、

一切の人類幸福の敵を亡ぼすは貴國の使命なり。

四

新しき科學と舊き智慧と、

歐羅巴の思想と亞細亞の思想とを、

自己の衷に統一せる唯一の民よ。

是等二つの世界、來るべき世の是等兩部を、
統合するは貴國の任なり。

五

流血の跡なき宗教をもてる唯一の民よ。

一切の神々を統一して、更に眞聖なる眞理を、
發揮するは貴國なる可し。

六

建國以來一系の 天皇永遠に亘る一人の 天皇を、
奉戴せる唯一の民よ。

貴國は地上の萬國に向つて、人は皆一天の子にして、
天を永遠の君主とする一個の帝國を建設すべきことを、
教へんがために生れたり。

七

萬國に優りて、統一ある民よ。
貴國は來るべき一切の統一に貢獻せんが爲に生れ、
また貴國は戦士なれば、人類の平和を促さんが爲に生れたり。

あけぼのの子等よ、海原の兒等よ。

斯くの如きは、花と焰との國なる、

貴國の七つの榮譽と七つの大業となり。

我國人たるもの深く、省み、鑑み、慮り、奮起せねばならぬものと切思する。以
下、尙右に關する修養上の指箴として、若干の事項を説述し、各位の御教示を仰ぎ度
と惟ふ。

「まごころ」(本心)は自己の主、師、親なり、萬事之と相談せよ。そは普く一切の道
に通ずるものと知れ。是「妙」に通ず、妙とは「廣大無邊」てふことの隱語なり。斯く
て「妙」を味ひ得ば、其味ひ無盡藏たり。そこに人世の幸福存在す。世人之を覺らず、

私の心に映じ
たる修養上の
指箴

徒らに幸福是求め、其得られざるや、悲觀して不幸とす。是、無理に非ずや。

心の疑りを解くもの、是れ道の徳、法の徳なるを知れ。

世人今日多くは世道の悪化を絶叫す。然れども之を自己自身に反求するの人士尠少なるは遺憾に堪へず。人々各々先づ自己自身を完全に改善せんか、世界はいやでも善化されざるを得ぬ。是れ世道救済の要道ならずや。

舉國民よ。日本は今や非常なる重大時機に際會せるものと知れ。道を通じて君民一體、上下一體の眞諦を着々實行し、實現せよ。而て日本を世界の模範國たらしめよ。日本に此素質あり、資格あり。努力の甲斐は必ず在ることを保證す。

勇猛精進せよ、要すれば誤れる先入概念を打破し訂正せよ。然れども之が爲め、あせる可からず。肚を養へ、心を練れ、「まこと」を求めよ。

國民の全部よ、教育を重視せよ、そは日本の救済主たるを知れ。然れどもそは先づ「まこと」と「まごころ」とに依り其方針を確立し、之により萬事が割り出されねばならぬ。而も成功急ぐ可らず。少くも幾十年の歳月を要するものと知れ。そこに青少

年の眞の教導が極めて大切にして、速に着手せられねばならぬ所以のものがある。

神は正しき道を示し給ふ。然れども、神は人間の小使ならず。徒に祈らんより、自己の「まごころ」に絶れ、力の限りを盡せ。是れ神の道たり。

「かけがへのない」大切な我の天子様と思へ、我の國と思へ。忠君愛國の念油然而して鬱勃たるものあらん。(社會、國家の事皆然らざるなし、何事にも自己の事として眞劍になれ。)

日本は神の精神(天地に通ずる「まこと」と「まごころ」)を以て治め來りたる國なり。之を是れ忘れ、拳固や劍で治めんとせば、國亡びん。而も必要に際せんか、斷乎として「まこと」に基く正義の刃を用ゆるに遲躊す可らず。爲政者よ、國民よ、先づ深く此眞諦に目醒む可し。劍は人を斬る可き劍ならず、自己の心を修る劍、邪を制するの劍たり。鏡は人を照し、その人を戒め正さんが爲の鏡たり。而て璽は自己の心を明らかにし、美しく生き、互に有り難く懐かしく思ひ、慕ひ合ひ、圓く納むる明あらしむる爲の玉たり。人や明なくんば人の價值なきを悟らねばならぬ。

而て如上三者は家庭と社會と實業界とを問はず、あらゆる一切を活かす可き無上の大道たるを知らなければならぬ。斯くて余は、「日本人と日本國とは、是非とも、世界の如何を問はず、常に悉く率先して正義の樹立に努め、人類と、人世と、世界との爲に、貢献するの覺悟と見識とを保持せざる可からざる」ことを茲に絶叫したい。是れ即ち畏くも 天祖 天照皇大神授國の神勅に明示し給へる、我崇嚴なる帝王道の眞髓にして、そこに「天壤無窮」の眞に無窮たる可き所以のものが嚴存する。而も這は實に亦國民各自が自己自身を生かす所以の道に外ならぬ。

三種の神寶

「三種の神寶」は宇宙の完全なる具體的縮小にして、宇宙精神、宇宙靈力、宇宙の事實を十全に表現する妙體なり。斯くてそは、我日本國に於る無上の神寶たると共に亦世界と宇宙との神寶であり。而もそが「まこと」と「まごころ」とに歸一する點で、無始無終、最高至上、廣大無邊の絶對性を完全に保有するものである。希くば、我賢明なる同胞各位よ。卿等先づ須くどこ迄も之を守るの覺悟を保持せねばならぬ。

「スタール」博士の切言に傾聴せよ

余は最後に、眞摯なる左記「フレデリック、スタール」Frederick Stahl 博士(有名な御札)の忠言(日本辭去に際し、昭和五年十月十五日「去るに臨んで親愛なる日本國民諸君へ」と題し、東京放送局より「ラヂオ」にて放送せるもの)を掲記して、明哲なる各位の一讀を乞はんと欲する。

「我が最愛する日本國の國民諸賢よ。須らく、自己に固有なる美はしき至寶を棄つる勿れ。劣等な西洋文明を輸入せんとして、尊嚴なる傳統的美點と由緒ある眞文化とを犠牲たらしむ可からず。獨創を尊び、模倣を去れ。米國に於て成功せる政策を、古き文明と稠密せる人口とを有する國に應用せんか、そは直ちに、混亂と失敗とを招來せん。貴國人よ、輕佻浮華に流るゝ勿れ、此惡風は日本の都市に於て最も甚し。今や、日本の青年男子は、日露戦争當時の如き剛毅勇武の風を失ひ、柔弱に流れて居る。更に特に目立つのは、日本婦人が彼等の賞讃す可き美德を棄て、西洋婦人の惡風に染みつゝあることにして、眞に日本を愛する者をして痛嘆せしむ。此他、徒らに他邦の驕奢と劣俗とを輸入して、得々たる勿れ。又見よ、復興せる東京の如何に日本の特色を失へるかを、そは日本を憧憬する我等をして、先づ失望せしむ。

終りに切言す、近來に於る日本外交の軟弱は、外國人をすら憤慨せしむ。日本人たるもの深く遠くそを惟はねばならぬ。古より正義に篤き日本人よ、どこ迄も、國際親善の精神と協調及び正義の觀念とを以て、世界に直面し、自主的見地より勇往邁進せねばならぬ。

親愛なる日本國民諸君よ、今や日本を去るに臨んで諸君に希望する。余は諸君が、光輝ある日本の傳統に忠實にして、日本國民の美德を涵養せられ、日本文明の精華を發揮すると共に、米國のみならず、世界各國の長所美點を採用し、以て日本をして、東亞のみならず、太平洋時代に於る眞の世界的「リーダー」(指導者)たらしむべく努力せられんことを、切望して止まぬものである。」

斯くて余は終りに左の如く切言しようと思ふ。

親愛にして賢明なる同胞各位よ。

活動する時が來た永遠に。

正しき道の爲に、一心に眞劍に。

同胞諸賢に一言す

急○く○な○、迷○ふ○な○、道○を○極○め○よ○、そ○し○て○、そ○を○實○現○せ○よ○。

斯くて又余は本書の歸結として「まごころ」の原動力たる左の一語を掲げたい。

まごころ

余は之を以て一先づ本書の局を結びたいと思ふ。

余は尙最後に謹みて 明治聖帝勅諭の一節を掲げ奉る。

- 一 軍人は忠節を盡すを本分とすべし
- 一 軍人は禮儀を正しくすべし
- 一 軍人は武勇を尙ぶべし
- 一 軍人は信義を重んずべし
- 一 軍人は質素を旨とすべし

右の五箇條は軍人たらんもの暫も忽にすべからずさて之を行はんには一の誠心こそ大切なれ抑此五箇條は我軍人の精神にして一の誠心は又五箇條の精神なり心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき心だに誠あ

れは何事も成るものぞかし況してや此五箇條は天地の公道人倫の常經なり行ひ易く守り易し汝等軍人能く朕が訓に遵ひて此道を守り行ひ國に報ゆるの務を盡さば日本國の蒼生擧りて之を悦びなん朕一人の憚のみならんや。

這は、獨り軍人のみならず、仁國にして武國たる我日本國民の爲め、唯一無二の信條たらねばならず。尙又、「實行」そのものに重點を置かせ給へる點で、特に時弊匡救に對する無上の淨劑たるものと拜察する。

明治聖帝御製

以下、尙謹みて 明治聖帝御製を掲げ奉る。

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

葦原の瑞穂の國の萬代もみだれぬ道は神を開きし

ちはやふる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ

何事に思ひ入るとも人はたゞまことの道を踏むべかりけり

千早振る神の心にかなふらむわが國民の盡すまことは

人はただまことの道を守らなむ高き賤き品はありとも

如何ならむ時に逢ふとも人は皆誠の道をふめとをしへよ

おのづから仇の心も靡くまで誠の道をふめや國民

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞ敷島の道

人もわれも道を守りてからはずば此敷島の國は動がじ

373
582

終